

【展 望】

日本の中学校の部活動が生徒の心理社会的発達に及ぼす影響に関する研究の展望

河村 明和*

日本の中学校の学校現場で取り組まれている部活動について、部活動が生徒の「生きる力」につながる心理社会的発達に及ぼす影響について、先行研究を整理することを目的とした。本研究において、部活動は中学校の生徒たちにとって、学校生活の中で比重の大きい取り組みであり、生徒の心理社会的発達には、1) その部活動が追求する内容に取り組むプロセスから、2) 部活動における集団体験から、影響を受けることが整理された。また、①全体に研究が少ないこと、②研究全体に総論的なものが多いこと、が明らかになった。

キーワード：部活動，中学校，心理社会的発達，部活動集団

【問題と目的】

近年の教育現場では、いじめや学級崩壊、不登校、学習意欲の欠如などの問題が表出している。このような現状の背景にある要因として中央教育審議会(2008)は、児童生徒の自制心や規範意識の希薄化や体力の低下が認められ、自分に自信がある子どもが国際的に見て少ないこと、学習や将来の生活に対して無気力であったり、不安を感じ、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど、人間関係の形成が困難かつ不得手になっていること、を指摘している。同様に、いじめや不登校など問題が多く起こっている要因として、コミュニケーション能力の低さが指摘されている(牧野, 2011)。

このような問題を抱えている学校において、人が人と社会生活を営むために必要とされる様々な能力やスキルを身につけるという心理社会的発達が求められている。文部科学省(1998)はこのように社会の中で生きていくために必要な能力を「生きる力」と呼び、確かな学力、豊かな心、健やかな体からなる知・徳・体のバランスのとれた力と定義している。また、この「生

きる力」は、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で獲得させ、自分への自信を育むことや体力の向上など、健やかな心身の育成についての指導を充実させる必要性を強調している。2008年に改訂された中学校学習指導要領(文部科学省, 2008)でも、生きる力の育成という基本的な理念は踏襲された。そのために、国語などの各教科をはじめとした言語活動の充実や、道徳教育の充実、公立中学校における体育での武道必修化など、伝統や文化に関する教育の充実などが図られた。

さらに、2008年(文部科学省)に改定された中学校学習指導要領で注目されるのは、初めて学習指導要領に部活動の意義や留意点が規定された点である。部活動は教育の領域として学習指導要領第1章第4節2の(13)に、学習との関連を明記されたのである。中学校現場では部活動は生徒の活動時間数などの面で相対的に比重の大きい活動であり、生徒にとって学校生活の中で比重の大きい活動ほど、学校適応や諸活動に対する意欲と関連していることも指摘されている(狩野・田崎, 1990)。したがって、文部科学省(2008)の指摘する「生きる力」に必要なとされる能力の獲得に、部活動は寄与する取り組みであると考えられ、部活動への取り組みが学校適応や諸活動に対する意欲と関連

* 早稲田大学大学院教職研究科

していると考えられる。

しかし、学習指導要領における部活動の位置づけの歴史的経過からも、各教科や教育活動に比べて、生徒が部活動に取り組むことの効果に関する実証的な実践報告は少ないのが現状である。生徒が学校の部活動に初めて取り組むことになる義務教育において、本研究では、部活動が生徒の「生きる力」につながる心理社会的発達に及ぼす影響について学術的な先行研究を整理することを目的とした。さらに、部活動指導時における教員の体罰の問題（文部科学省, 2013）や部活動集団で発生するいじめの問題などのマイナス面も指摘されているのを踏まえて、日本の中学校の部活動のプラス面だけではなく、マイナス面も含めて整理し、部活動が生徒の心理社会的発達に及ぼす影響について検討していくことにする。

【方法】

文献検索は中学校、部活動をキーワードに1980年から2015年までの学会論文を検索した。なお1989年の改定まで学習指導要領により、教育課程の中に位置づけられていた『クラブ活動』は、任意での参加ではなく、全生徒の参加が義務付けられていた活動のため、今回の検索対象からは除外した。研究雑誌と該当件数は、心理学研究 1件、教育心理学研究 2件、発達心理学研究 1件、青年心理学研究 1件、カウンセリング研究 0件、教育カウンセリング研究 0件、実験社会心理学研究 0件、であった。また、これらの研究雑誌に掲載されていた論文の中で頻りに引用されている論文は、学会発表論文集に収録されている発表論文、大学紀要等も含め、本研究に關係する文献対象として抽出した。なお、それらの先行研究に引用され、先行研究を概観する上で重要と思われる論文や書籍については、年代も1980年以前のデータを一部対象とした。さらに、取り上げた日本の論文に引用され、その著者の主張を補足するために用いられた海外文献については、その範囲で一部取り上げた。これらの文献の中から、①部活動の取組と生徒の心理社会的発達に関する知見、②部活動集団に関する知見、③部活動に関する問題点についての知見、という3つのカテゴリーに分け、その後の分析の対象とする研究を選択した。なお、

例えば、陸上部などを対象に生徒の走力の向上などを対象にした研究、展望論文などは対象外とした。

【結果】

1. 部活動の取組と生徒の心理社会的発達に関する知見

生徒にとって部活動は学校生活の中で比重の高い取り組みである。例えば、中学生は高校生と比較して部活動に対して積極的に参加している割合が高いことが指摘され（Benesse 教育研究開発センター, 2007）、首都圏40km圏内の中学生を対象とした調査においても、有効回答者96%が部活動を経験していると回答している（無藤・川浦・角谷, 2001）など、中学生の部活動の取り組み時間の多さの指摘は少なくない。狩野・田崎（1990）は、生徒にとって学校生活の中で比重が大きい活動ほど、学校適応や諸活動に対する意欲と関連していることを指摘している。森川・遠藤（1999）も自らの興味に沿った自主選択による活動として、部活動は依然、中学生の実生活や意識の中心にあることを指摘している。

吉村（1997）は部活動への満足感が高い部員は学校生活全体への満足感も高いことを報告しており、部活動への満足感が学校生活全体への満足感にも結び付くことを示唆している。同様に、角谷（2005）も部活動での積極性が高いほど、その時期の学業コンピテンスや学校生活への満足度が高く、部活動での積極性が高いと、その後の学校生活満足度がより大きく伸びる可能性があることを示唆している。さらに加えて、部活動で積極的に活動できることは、どの時点でも中学生の中学校生活への満足感の高さと関連するだけでなく、学校生活への満足感を、時期を追って高めることにつながる可能性があることも指摘している。さらに、生徒自身が主体的に選択した部活動を途中で投げ出さずに、持続的に行うならば、結果的にその行為は、生徒自身の自己確立（自立）につながることも指摘されている（山口, 2001）。岡田（2009）は部活動に積極的な生徒は部活動に所属していない生徒に比べ、学校生活の諸領域や心理的適応の得点が高いことを明らかにしている。角谷・無藤（2001）は部活動継続者にとって、クラスだけでなく、部活動においても中学生の欲求

が満たされていれば、充実感や学校生活への満足度が高まる可能性がある。特にクラスでの欲求満足度の低い中学生にとって、部活動は学校生活への満足度を高めてくれる要因となりうることを示唆している。また、音楽や、趣味活動などの非運動系の活動であっても、それが挑戦をもたらし、努力が必要な活動であれば、生徒の学校生活にポジティブな影響を与えうることを指摘している (Shaw, Kleiber, & Caldwell, 1995)。つまり、一つの達成感が生徒の自信となり、学校生活の他の領域の意欲の喚起につながると考えられる。さらには学業成績や意欲、学校生活への態度についての調査の得点の比較において、運動系と非運動系では、非運動系の生徒の得点が高いという結果が出ている (Darling, Caldwell, & Smith, 2005)。生徒の立場から見た報告として、部活動から得られるものとして多くの生徒が「友情を育てる」、「技術・能力を磨く」、「体力を養う」、「強い意志 (根性) を養う」ことを挙げている (福武書店教育研究所, 1983)。これらの要因として、部活動で要求される認知的な能力やソーシャルスキルが、クラスの文脈にも良い影響を与える可能性も示されている (Darling et al., 2005)。

また、部活動に参加している生徒は逸脱行動が低下する結果も発表されている (Mahoney & Cairns, 1997)。Larson (1994) は非運動系の部活動参加が逸脱傾向の低さにつながることを指摘している。日本における部活動の性質に近い欧米諸国における課外活動に、青年期の問題行動や退学などを予防するプログラムとして機能していることも示されている (Berkovitz, 1997)。部活動には、「青少年の体と心の発達に貢献する可能性」、「身体の自己管理の能力と集団の自主的な管理・運営の能力を鍛え、青少年のなかみに自治的能力を豊かに育む可能性」、「青少年が仲間を作り、友人を増やし、連帯や協同を体験するチャンスの可能性」といった、生徒の発達と学校生活の充実をうながす三つの豊かな可能性を秘めていることが指摘されている (城丸・水内, 1991)。

以上から、日本の中学校では、部活動は生徒の学校生活の中心の一つとして位置づけ、その積極的な参加が学校適応と他の学校生活の諸活動にもプラスの関連が認められていること、非行などの逸脱行動の予防にも役立っていることが先行研究では指摘されている。

だが、部活動の活動内容に踏み込んで、生徒のどのような関わりがどのような心理社会的発達に影響を与えるのかについての実証的研究は、本邦では少ないのが現状である。

2. 部活動集団に関する知見

部活動への取り組みが生徒にもたらす様々な影響は、野球部なら野球、吹奏楽部なら吹奏楽という、その部活動が追求する内容から得られるものも多いが、部活動に集う生徒たちの人間関係、部活動集団での集団体験も様々な影響を生徒たちに与えることが指摘されている。例えば、部活動に参加している生徒は参加していない生徒と異なり、部活動を中心とした友人関係を形成しやすい (岡田, 2009) ことや、部内の人間関係だけでなく、周囲の児童・生徒の人間関係にも大きな影響力を持っている (坂西, 1993) ことも示されている。さらに、中学生が中途退部の理由として挙げる割合が高いものは人間関係で、部活動を継続するか否かは部内の人間関係によって大きく左右されていることが指摘されている (高知県スポーツ教育センター, 1993)。中学生の時期は主体性や親密性の欲求が高まり、自ら選択し様々なことに挑戦したり、主体的に活動できる場や、仲間との持続的で親密な関係を築くことのできる場を必要とするようになることが指摘されている (e.g., Eccle, Midgley, Wigfield, Buchanan, Reuman, Fkanagan, & Iver, 1993; Eccles, Wigfield, & Schiefele, 1998)。そして、運動系の部活は、身体的・精神的な挑戦をもたらすだけでなく、コンピテンスの向上やその集団への同一視によりアイデンティティ形成を促進することから、発達に良い影響があるとされている (Shaw et al., 1995)。Karweit (1983) も部活動は中学生にとって重要な人間関係形成の場であることを指摘しており、角谷・無藤 (2001) は部活動の集団が (運動部か文化部かによらず) そのような場を提供する役割を果たしていると述べている。

だが、狩野 (1994) は個人のアイデンティティが形成されるのは、あらゆる所属集団においてではなく準拠集団においてのみであると述べている。つまり、生徒はただ部活動集団に参加していればよい影響が生まれるのではなく、その部活動集団の質が問われるのである。石井 (2000) は集団モラルが高い部の特徴として、部員同士のまとまりを挙げており、土屋 (2004)

は他者と本音で刺激しあい、共感しあう経験をした運動部員には、ストレスや競技不安の低減、およびやる気の高まりがみられると述べている。吉村(2010)は主将の「人間関係が分裂しないように部員全体とかかわり」かつ「部員同士が積極的に自己表現し相互理解しあう」ようにするスキルが、部員の部活集団への連帯性を高め、その結果、適応感を高めることを示唆した。さらに、部がまとまる人間関係を形成するためには、部員が利己的表現を抑えて小集団間の連携を図るとともに、主将の積極的かつ圧力の強い指導が必要になる。その結果として団体種目の部員は部の雰囲気満足しやすくなることを示唆している。

また、部員が集団にとどまって活動しようとする力は、環境、チーム、個人、リーダーシップの4つの要因に規定されるという知見もある(Carron, 1982)。狩野(1994)は集団の雰囲気形成は、その集団のキーパーソンの言動に左右されることが多いとし、中学校の部活動において大半のキーパーソンは顧問教師であると指摘している。尼崎・清水(2009)は部活動内での部員の指導者に対するストレスは部員の集団効力感を低下させることにつながる可能性を指摘している。角谷・無藤(2001)は中学生が認識した顧問教師の指導性が高まると、中学生が認識した部活動の集団凝集性も高まることを指摘している。

以上から、部活動の取り組みから得られる効果は、その部が追求する内容だけではなく、部活動に集う生徒たちの人間関係や部活動集団の影響もあることが指摘された。特に、後者の部活動集団の雰囲気、所属する生徒たちの人間関係の状態が、生徒にプラスにもマイナスにも影響することが先行研究では指摘されている。さらに、部活動集団の質や雰囲気を規定する要因として教員のリーダーシップのあり方が指摘されている。だが、部活動集団の状態をカテゴライズして生徒の心理社会的変数と合わせて実証的に検討した先行研究は、本邦では見られず、文部科学省(2008)が指摘する「生きる力」に言及した研究もなかった。さらに、教員のリーダーシップと運動部の成績との関係の報告は一部見られるものの、教員のリーダーシップと部活動集団の状態や所属する生徒たちの人間関係に踏み込んだ実証的な研究も、本邦では見られなかった。

3. 部活動に関する問題点についての知見

文部科学省(1997)は部活動の問題点として「指導者の指導力の不足」を指摘した。この中で中学生では13.3%、保護者は、16.1%が、「指導者の指導力の不足」を問題としてあげていることが明らかになっている。また、運動部の顧問の教員も「自分の専門的指導力の不足」を40.0%があげており、生徒や保護者だけではなく、顧問の教員も不満や不安を抱えている現状が認められるのである(文部科学省, 1997)。これは欧米では部活動に相当する課外活動の指導は社会教育の専門的指導者が行うのに対して、日本では学校教育に位置づけられ教員が指導することが主となるという特徴が、この問題点の背景にあると考えられる。各学校の教員組織の構成で、特定の部活動に対してその指導をするにたる専門性を有する教員がいない場合には、他の教員が担当せざるを得ないというケースである。

また、文部科学省(2013)は部活動時に顧問の教員が行う体罰の問題を指摘している。国立、公立、私立学校の体罰時の状況において、体罰が発生している件数、そしてその割合は部活動が最も多く、中学校では1,073(38.3%)件、そして行われている場所は運動場・体育館が最も多く、中学校1,136(40.5%)件となっていることが明らかになっている。高田・田村・石淵・藤永・下山・柚木・黒梅・丹野(1988)は、本来自発性であるはずの部活動が強制参加や、勝利至上主義などにより青年期の心理的発達を妨げることになる可能性もあることを指摘している。

さらに、部活動集団内に発生するいじめの問題にも注目する必要がある。文部科学省の発表するいじめの定義によると、いじめとは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものも含む)であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と規定され、「いじめ」にあたるか否かの判断は、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとされている(文部科学省, 2013)。同じ学校に在籍して一定の人的関係にある場合とは、被害者と加害者が同じ継続した集団に所属している場合が考えられる。学校内でそのような継続した所属集団とは学級だけではなく、部活動の

集団も該当する可能性を表している。部活動においてもいじめや体罰などの問題行動は、発生している割合は低い、指導者、生徒（部員）ともに発生していること、いじめや飲酒、喫煙などの生徒の問題行動は運動部を中心に発生していること、部活動の問題行動は指導者の問題行動（今回は部員に対する暴力）が起点となっている可能性があること、などが明らかになっているが、これまでにおける部活動研究の中心課題は、教育的効果の解明であり、部活動は問題行動の舞台となるものの、それに関する学術研究の蓄積は少なかった（長谷川, 2013）。中学生にとって部活動での様々な体験が精神衛生に大きな影響を及ぼすこと、また中学時代の部活動の体験が青年後期の自尊感情と関連があることも示唆されており（都築, 1984）、同時に、部活動集団内における対人関係での挫折体験もまた、中学生の精神衛生や自我意識に大きな影響を与えることが予測される（稲垣, 1996）。部活動の集団体験から生徒が学ぶものは、その集団が建設的な状態であれば個々の生徒たちの精神衛生や自我意識にプラスの面をもたらすことが多いだろうが、集団の状態が不安定であったり、所属する生徒たちに不満やストレスが高まっているとき、集団内の生徒たちの人間関係の相互作用は個々の生徒たちの精神衛生や自我意識にマイナスの面をもたらす可能性が高いのである。運動部の生徒は反社会的傾向が高い（岡田, 2009）という指摘もあり、部活動集団をどのように形成していくのかという問題は、学級集団づくりと同様に大きな問題である。

以上から、部活動に関する問題点は、結果の1, 2で整理された部活動から得られるプラスの効果の作用が、マイナスに作用したものと考えられる。つまり、1, 2で示された効果は、同時にマイナスにもつながるという面を持っていることが、あらためて整理された。

【考 察】

結果の1, 2, 3から、次のことが整理された。部活動は中学校の生徒たちにとって、学校生活の中で比重の大きい取り組みであり、生徒の心理社会的発達に与える影響がある。その影響は生徒の対人関係能力や集団活動にコミットする能力に関連するものであり、文

部科学省（2008）の指摘する「生きる力」につながるものであると考えられる。そして、生徒たちは、1) 部活動が追求する内容に取り組むプロセスから、2) 部活動における集団体験から、心理社会的発達に関わる影響を受けていることがわかった。ただし、1) と2) の内容が生徒たちの心理社会的発達にプラスの効果をもたらすためには、指導者である教員の適切な指導と良好な部活動集団づくりが前提条件になることが整理された。教員の指導性に関しても、教員が置かれた状況などを考えると、個人的要因だけではなく、組織的要因も含めた中学校の部活動が置かれた社会的要因も関連があることが示唆された。

2008年（文部科学省）からの中学校学習指導要領で、部活動の意義や留意点が規定され、部活動は教育の領域として学習との関連を明記された。しかし、先行研究を概観すると、部活動の取り組みを通して生徒が学習する「生きる力」につながる心理社会的発達のメカニズムについての知見は、①全体に研究が少ないこと、②研究全体に総論的なものが多いこと、が明らかになった。また、部活動に関する体罰やいじめなどの問題も指摘され、学校教育関係者や学校現場の教員たちが、部活動を教育の領域としてより効果的なものにするためには、具体的に、顧問の教員がどのような指導理念と方法、そして部活動集団づくりを目指すべきなのか、その指針となる知見が必要となることが本研究で明らかになった。それは学級担任が行う学級経営を展開する上で求められるもの、教員の指導行動と学級集団づくりのあり方、と同様である。つまり、従来教員たちの経験則で取り組まれてきたものにエビデンスが求められ、その評価の上でより効果が期待される手法を選択して取り組んでいくことが必要になってきたことである。そして、エビデンスとなる知見の積み重ねが、部活動領域では今後とくに求められると考えられる。今後の課題としたい。

【引用文献】

尼崎光洋・清水安夫 2009 高校野球部員を対象とした集団効力感の研究 集団凝集性及び部活動ストレッサーとの関連による検討 学校メンタルヘルス, 11, 23-31.

- 坂西友秀 1993 クラブ活動と人間関係 宮川充司・坂西友秀・大野木裕明(編) 児童・生徒の発達と学習 ナカニシヤ出版, 109-116.
- Benesse 教育研究開発センター 2007 「第4回学習基本調査報告書」
- Berkovitz, I. H. 1997 Junior high/ middle school and high school life. In L. T. Flaherty, & R. M. Sarles (Eds.), *Handbook of child and adolescent Psychiatry Vol.3*. New York Wiley.
- Carron, A. V. 1982 Cohesiveness in sport groups Interpretations and considerations. *Journal of Sport Psychology*, 4, 123-138.
- 中央教育審議会総会 2008 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)
- Darling, N., Caldwell, L. L., & Smith, R. 2005 Participation in school-based extracurricular activities and adolescent adjustment. *Journal of Leisure Research*, 37, 51-76.
- Eccles, J. S., Wigfield, A., & Schiefele, U. 1998 Motivation to succeed, In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology. Vol.3, Social, emotional, and personality development*. New York John Wiley & Sons.
- 福武書店教育研究所 1983 モノグラフ・中学生の世界—中学生の部活動 Vol.14
- 長谷川祐介 2013 高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み 指導者の暴力, 部員同士の暴力・いじめに着目して 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 35, 153-163.
- 稲垣応顕 1996 いじめられ登校拒否傾向に陥った女子中学生への感情表出トレーニング適用事例の検討 暁星論叢, 39, 25-41.
- 石井源信 2000 スポーツと集団力学 杉原隆・船越正康・工藤孝幾・中込四朗(編) スポーツ心理学の世界 福村出版, 165-181.
- 角谷詩織 2005 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか 学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから 発達心理学研究, 16, 26-35.
- 角谷詩織・無藤隆 2001 部活動継続者にとっての中学部活動の意義 充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて 心理学研究, 72, 79-86.
- 狩野素朗 1994 集団成員性の階層構造と凝集力 九州大学教育学部紀要 教育心理学部門, 39, 1-6.
- 狩野素朗・田崎敏昭 1990 学級集団理解の社会心理学 ナカニシヤ出版
- Karweit, N. 1983 Extracurricular activities and friendship selection. In J.L. Epstein, & N. Karweit (Eds.), *Friends in school Patterns of selection and influence in secondary schools*. New York Academic Press.
- 高知県スポーツ教育センター 1993 運動部活動に対するアンケート調査について 高知県スポーツ教育センター研究紀要, 9, 1-57.
- Larson, R. 1994 Youth organizations, hobbies, and sports as developmental context. In R. K. Silbereisen & E. Todt (Eds.), *Adolescence in context The interplay of family, school, Peers, and work in adjustment*. New York Springer Verlag.
- Mahoney, J. L. & Cairns, R. B. 1997 Do extracurricular activities protect against early school dropout? *Development Psychology*, 33, 241-253.
- 牧野幸志 2011 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発- コミュニケーション・スキル訓練が自己評価に与える影響 - 経営情報研究摂南大学経営情報学部論集, 18, 107-118.
- 無藤 隆・川浦康至・角谷詩織 2001 青少年へのテレビメディアの影響調査第1回(2000年度) 調査報告書 放送と青少年に関する委員会
- 文部科学省 1997 運動部活動の在り方に関する調査研究報告(中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議)
- 文部科学省 1998 小・中学校学習指導要領
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領
- 文部科学省 2013 体罰に係る実態把握(第2次報告)の結果について
- 文部科学省 2013 いじめ防止対策推進法
- 森川貞夫・遠藤節昭 1999 必携スポーツ部活動ハンドブック 大修館書店
- 岡田有司 2009 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響 部活動のタイプ・積極性に注目して 教育心理学研究, 57,

- 419-431.
- Shaw, M. S., Kleiber, D. A., & Caldwell, L. L. 1995 Leisure and identity formation in male and female adolescents A preliminary examination. *Journal of Leisure Research*, 27, 245-263.
- 城丸章夫・水内 宏 1991 スポーツ部活はいま 青木書店
- 高田知恵子・田村 宏・石淵真理子・藤永 隆・下山 定利・柚木 仁・黒梅恭芳・丹野義彦 1988 部活動体験による青年期不適応について 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8, 37-45.
- 土屋裕睦 2004 チームビルディングとソーシャル・サポート (日本スポーツ心理学会 (編) 最新スポーツ心理学 その軌跡と展望) 大修館書, 219-230.
- 都築 等 1984 いわゆる部活動の中学生の精神衛生に与える影響 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 5, 49-55.
- 山口 満・安井一郎 2001 新版特別活動と人間形成 学文社
- 吉村 斉 1997 学校適応における部活動とその人間関係のあり方 自己表現・主張の重要性 教育心理学研究, 45, 337-345.
- 吉村 斉 2010 部活動への適応感と競技特性の関係 運動部員の対人スキルと主将のリーダーシップに注目して 青年心理学研究, 22, 45-56.

(2015年12月21日 受稿, 2016年2月2日 受理)

The Prospect of the Study that what Kind of Influence Extracurricular Activities of Junior High School in Japan have in Psychosocial Development of Students.

Akikazu Kawamura (Waseda University)

This research aimed to organize previous researches about extracurricular activities of junior high school in Japan and influence that psychosocial development to be related to “zest for living” of students is affected by extracurricular activities. This study was proved that it is very important for junior high school students in Japan to join extracurricular activities in school life. And their psychosocial development is affected by 1) the process of working contents to pursue in extracurricular activities and 2) their group experiences of extracurricular activities. Moreover, research results revealed that ①there are few studies of this field of study, and ②there are many general articles in this field of study.

Key words: extracurricular activities, junior high school, psychosocial development, extracurricular activities members.